

地理学科で感じたこと

内 山 幸 久

一九七九年四月以降、小生は立正大学文学部地理学科に勤務するようになった。文学部七十周年を迎える一九九四年に至って、この間十六年目になるが、立正大学文学部地理学科に勤務してこれまで感じてきたことのいくつかを述べることにしよう。

立正大学へ赴任した頃

一九七九年三月末に香川大学教育学部を辞職し、同年四月一日から立正大学文学部に勤務することになった。そこで小生は六年間住んだ香川県木田郡牟礼町の宿舎を三月末に家族ともども引き払って、神奈川県相模原市の住居に引っ越した。公務員なら赴任手当も出るのだが、

立正大学にはそのようなシステムがないようで、小生は当時としては大金をトラック運送業者に支払って、家財道具の運搬を完了させた。後日、公務員の赴任手当の話を地理学科の某先生にしたところ、「変なことをいう先生だ」と言われ、「赴任手当が欲しいなら立正大学に転勤して来なければよかったのに」と言われ、小生は何も言えなくなってしまった。いろいろな言い方があるものだと感じ、小生は嫌われているのかなと考えこんでしまった。

引っ越し先の相模原市の住居は、大学院博士課程の時期を過ごした場所であったことから、住居そのものにはほとんど抵抗はなかった。しかし、立正大学構内へはそ

れまでほとんど入ったことがなかったので、辞令が発令される直前の三月末に立正大学を一人でひそかに訪れてみた。立正大学では卒業式がすでに終わった後の春休みの期間であったため、当然のごとく大学構内には学生はもちろん、教員と思われる人も全くいなかった。小生は文学部地理学科の研究室のある場所がわからなかった。事務員と思われる人にもその場所を聞いて、当時の文学部棟の三階に行ってみた。そこには木の扉があり、鍵がかかっていた。そのため中に入れなかったで、その周りをしばらくうろついた後に帰宅した。実はこの時に、これから自分の研究室になるであろう部屋に本がどのくらい収納できるかということ調べたかったが、それもできなかった。建物の印象としては「狭い構内で古い建物だな」ということであった。

後日、立正大学で正式に辞令を受け取った後、部屋の鍵を受け取って、始めて自分の研究室に入ってみた。その後、小生の研究室の掃除をして、そこに本を運び入れたが、本棚が足りなかった。当時、地理学科の助手をし

ていた寺田稔（現、北海学園大学教授）先生が、空いていた本棚をどこからか持ってきてくれて、何とか本を納めることができた。この研究室は物置状態になってしまったのである。

当時、小生の研究室は大村肇先生（立正大学名誉教授、故人）の研究室の隣であった。前の大学の研究室と比べて今度の研究室は狭くて、しかも、小生の研究室の薄いドアをはさんだ隣が地理学科のインフォメーションセンターとも言えるべき部屋となっており、地理学科の教務補助員の女性がそこで業務をしていた。この部屋へお茶を飲みに来たり雑談に来る先生も多く、また地理学科への訪問客が来る場所でもあった。さらに、地理学科の各先生への電話もこの部屋によくかかっていた。教務補助員が不在の時はそれらのすべてに対応しなければならず、これが大変なことであった。はっきり言って小生の研究室は研究をするための部屋という状態ではないと感じた。その後、新築の研究棟へ移ってからは、それらの業務から解放され、正直言ってほっとした。

立正大学文学部に勤務するようになって、学生や教職員の方々によく言われてきたことで（今でも言われることでもあるが）、当初は不思議に感じたことが一つあった。それは「先生、次はいつ大学にいらっしゃいますか」という質問であった。一般に自然科学系の大学教員は出校していることがほとんどで、そのような環境で学生・院生時代を過ごしたため、教員は別のところで特に用がない限り、出校しているのが当たり前と思っていた。小生は香川大学時代には原則的に出校していたため、立正大学に赴任して先のような質問をされ、当初はやや違和感を感じた。しかし、立正大学で周りを見回してみると、教員各位は用がない限り出校してこないということに気がついた。当時の立正大学の研究室の環境は前述のように不十分であり、また、各先生はそれぞれ忙しいようであり、大都会のど真ん中に大学があることから通勤時間が非常に長くなっていることで、この点はやむを得ない面があるのかなと思うようになった。小生も、研究のために研究用の製図をしたり、論文を書いたりする際に

は、自宅の方が他人にじゃまをされることがなくて、作業がはかどると感じるようになり、家で論文作成などの仕事をするが多くなった。家にいる時にかかってくる電話の第一声は「おやすみのところ失礼とは存じますが：」というのが常である。でも家にいても、病気の時は別として、寝ていたり遊んでるわけではない。仕事をしているのである。以上のような傾向は、研究室環境が良くなった一九九二年以降も相変わらず続いている。

地理学の授業について

地理学に関する講義や実習などで感じたことを述べてみよう。立正大学に移って講義をしてまず感じたのは、講義中に学生の私語が少ないことであった。小生が経験した限りにおいて、すなわち非常勤講師などでよその大学で講義をすると、授業中に学生の私語が多いのがいつも気になっている。立正大学の学生の場合は、よその大学の学生に比べて私語が少ない方であると思う。私語が少ないと大きな声を出さなくてもよいし、講義がしやす

くて、この点は非常に助かる。しかし、しばらくしてから、まるでテレビを見ているように講義を受講している学生が多いように感じるようになった。「私語が少ないのは、受講学生の反応がないことによるのかな」と思えてきた。ただし、講義内容について試験をしてみると、成績はともかくとして、「講義をそれなりに聞いているのかな」という風に思えるので、学生は小生の講義をそれなりに聞いているものと理解している。

私立大学では受講学生数が多いということがよくいわれる。しかし、講義における受講学生数の多いのは香川大学での一般教育の授業などで経験済みであったから、この点は立正大学にきてもそれほど違和感はなかった。しかし、担当するゼミの学生数が多いのにはびっくりした。これについては小生の学生時代にもなかったことで、香川大学でも経験したことがなかった。

ゼミの学生数は昼間主(部)だけでも毎年十五〜二十人を数え、多いときは二十人を超える。年により昼間主(部)の学生と夜間主(部)の学生の両方を指導すると

なるとますます大変な労力である。さらに、これらの学生の卒業論文の指導だけでも大変な労力である。ゼミ学生数の多さに当初は戸惑いを感じた。しかし「私立大学ではやむを得ないことなのかな」と考え、これに対処するようになった。このゼミ学生数の多いことについても、二、三年ほどで慣れてしまったのであるから、慣れとは恐ろしいものである。

地理学科学生の卒業論文をみると、「立正の地理」の伝統もあって、地域調査によるものが圧倒的に多い。全国各地から地理学科へ多くの学生が入学してきて、その多くの学生が卒業論文の研究対象地域に自分の出身地を選んでいる。小生は、卒業論文指導の学生が興味を持つ地域のすべてを知っているわけではなく、また調査をしたわけでもない。しかし、人文地理学の調査方法にそれほど変わりがあるわけではないので、それなりに学生への卒業論文指導には対処できると思っている。学生の卒業論文をみると素晴らしいものもいくつかある。しかし、他人の書いた文章をそのまま写しているのではないかと

思われる卒業論文もあった。現実には、他人の論文の全文をそのまま写して卒業論文として提出したものがあったことに後で気がついて、なんとも悲しくて悔しい思いをしたこともある。

ゼミ生の就職について

立正大学に移ってきた頃は世の中の景気も良い時代で、学生の就職についてはあまり気にならなかった。学生もそれなりに就職先を見つけて卒業していった。しかし、バブル経済崩壊後の昨今においては、学生も思うようにはいかないようである。ゼミをしても就職に関する彼等のいらだちが感じられて、何ともやりきれない思いがする。「出口が良くならないと入口も良くならない」というのが世間で一般に言われることであるが、ゼミ学生すべてに対して就職を斡旋することは、力不足の小生にはとうてい不可能なことである。早く世の中の景気が良くなって、学生が首尾良く就職できるようになることを願うのみである。ただ、社会人として頑張っている元

ゼミ生が、何かの折に大学を訪れてくれると何とも楽しくなる。

野外実習について

大学の地理学関係の授業に野外実習がある。これは全国の大学に共通のことである。立正大学文学部地理学科の伝統は、地域の実態を調査し、それに基づいて研究をまとめるということである。これは地理学そのものが持つ伝統的な研究方法でもあるから、地域の調査法を学生が習得するために、野外実習はなくてはならないものである。

立正大学文学部地理学科で野外実習を実施するに当たっては、まず、実習のテーマを決定し、実習地と実習期間を決定し、参加学生を決めることから始める。これらのことは野外実習を実施する前年度に行なわれるが、学生の野外実習参加の手続きについては文学部の『履修の手引き』に詳しく掲載されている。ただし、すべての学生が野外実習の参加に関するきちんとした手続きをとって

くれれば問題はないのであるが、指定の期間内に実習参加申込手続きをしない学生も多く、この事後処理も実際には面倒なことが多い。

野外実習を実施するに当たっては、まず実習地の宿泊先を決定する必要がある。宿泊費用が高額になると、教員はもちろんのこと、学生にとっても負担が大変なので、宿泊費が安くて感じの良い宿泊先を見つけ出すことは、大変なことである。宿泊先を決めてから、学生に対して野外実習実施に当たったの説明会を行なうが、この際に、実習中の事故に対する保険金を集めることも必要になる。この説明会にほとんどの参加予定学生は参加をするが、時として無断欠席をする学生もみられることは残念なことである。

小生の場合、一泊二日の野外実習では、学生を現地集合させて、実習地の地域の特徴を説明するという方法をとっている。一泊二日の日程では実習地を遠距離にすることができないので、小生は下田市を中心とする南伊豆を選ぶことがほとんどである。南伊豆は、小生の大学院

時代に先生や先輩・後輩諸氏と共同で調査をして、その結果を本にまとめた地域である。南伊豆は地域変貌の激しい地域であり、地理学の研究対象地域として興味のある地域である。また、下田市で常宿にしている温泉民宿「お蝶店」の増田平一氏とは一九六七年以来のつきあいであり、この民宿を学生の宿舎として利用させていただいている。学生の実習の宿泊では、増田さんには過大なサービスをしていただいている。

一方、三泊四日や五泊六日の野外実習ではその時の状況に応じて、実習地を決めている。小生は人文地理学・農業地理学を専門としていることから、農村地域や地方都市で実習をすることが多い。農村地域や都市地域の土地利用調査の実習を行ったり、農家や商店などでの聞き取り調査の実習をするなど、野外でなければできないことを試みている。

立正大学に赴任した頃は野外実習の期間にそれほど抵抗がなかったが、やや歳をとった(?)せいか、最近はいくつかの野外実習ではさすがに疲れを感じるようになった。

た。実習で学生とともに共同生活をして、学生指導を行なうとともに、事故がないようにと気を使うわけである。特に五泊六日のうちの三日目を過ぎる頃はさすがに疲れを感じて、「頑張らなければ」と自らを励ますようになってきた。この傾向は、他の先生に聞いても同じようであるらしい。

地理学の研究について

小生の専門分野は人文地理学の中の農業地理学ということであるが、特に果樹生産地域に関しては特に興味をもって調査・研究をしてきた。なぜ農業地理学で、果樹生産地域かというと、小生の大学での卒業論文までさかのぼることになる。すなわち、小生の実家が長野市の郊外農村部でリンゴ生産をする第二種兼業農家であったことで、長野盆地の果樹生産に関することを調査すれば大学での卒業論文になると単純に考え、卒業論文の作成をした。この安易な考えが、大学院からその後の研究活動を決定づけてしまったのであるから、本当に恐ろしい

ことである。でも、後悔はしていない。なお、果樹生産の場合は、米作でみられるような政府による生産・出荷の統制をあまり受けることがなく、さらに、地域と農家の特性によりそれぞれの果樹生産地域が発展してきていることが、地理学の研究対象として好都合なことであると感じたので、果樹生産地域に関する研究を始めたのも事実である。立正大学へ移ってきてからも果樹生産地域の研究を中心に行なってきた。全国的な果樹生産地域の動向を統計的に把握してきたことはいうまでもないが、長野盆地のリンゴ・ブドウ・モモ・クリ生産地域、山梨県甲府盆地東部のブドウ・モモ生産地域、香川県東部のブドウ生産地域、広島県因島市の柑橘生産地域、静岡県南伊豆地方の柑橘生産地域には特に関心を払って調査・研究をしてきた。それぞれ思い出のある地域であるが、さらに今後も注目をしていく地域であると考えている。

果樹生産地域の研究以外の農業地理学の分野では、たとえば、神奈川県の農業の特色に関しては正井泰夫先生にお世話になり、まとめることができた。さらに、養豚

業の調査も実施してきた。

農業地理学以外の分野でも興味のあることには積極的に取り組んできた。たとえば長野市の商店街地域に関する都市地理学的な研究や、高知県香北町の高齢化問題といった人口地理学的研究や、香川県牟礼町の漁業問題など、さまざまである。これらは、小生の研究上の浮気的分野かもしれないが、人文地理学上の調査・研究の幅を広げる意味では大変に役立ったと考えている。

さらに共同研究についてみよう。小生が立正大学文学部地理学科に赴任した一九七九年に稲永幸男先生（立正大学名誉教授）や澤田裕之先生に、わが国の植木生産地域に関する共同研究に誘われた。当時、植木生産地域を地理学的に調査・研究した例はほとんどなく、また、植木・苗木生産に関する統計資料も乏しく、大変な調査・研究であった。しかし文部省科学研究費を得ることができた一九八〇・八一年にその調査・研究が本格化した。この調査・研究は、植木・苗木生産地域における関係者への聞き取りを主として進められ、いわば地理学本来の

調査方法により進められた。また、学生アルバイトを雇って調査を進めてきたが、さすがに地理学科で選りすぐった学生を雇ったせいも、調査は比較的順調に進んだ。地理学科学生の実力を見直した時期でもある。

小生が担当した地域は、稲沢市・高松市鬼無町・広島市安佐町・池田市・津市高野尾・出水市高尾野の植木・苗木生産地域であり、他の先生方と共同で調査を進めた。当初、科研費による植木生産地域の共同研究に関する事務所理をしていたのは澤田先生であった。しかし、二年目（一九八一年）の研究を進めるに当たって、それまで参謀役をしていた山中進（現、熊本大学教授）先生は四月に熊本大学へ栄転された。さらに、澤田先生は同年五月に海外研修として、アメリカ合衆国へ十か月余りの研修に出かけてしまった。その結果、一九八一年の文部省科研費の会計事務と報告書作成といった業務が小生に回ってきた。それまでは次男坊的性格で調査研究を進めてきたが、今度はそのようにはいかなかったのである。これは立正大学へ赴任して三年目のことであった。立正大

学のシステムの様子もよくわかっていない時であり、人的つながりもなかっただけに、さすがに緊張を覚えた。

幸いながら大塚昌利・寺田稔・松井秀郎の三先生の協力を得て無事に役目を果たすことができた。この共同研究については、当時の文学部地理学科の人文地理学を専門とする若手の先生方が一体となって進めた研究であり、後に単行本にして皆で出版することができた。文部省科研費による共同研究をその後もいくつか実施してきたが、そのなかでも植木・苗木生産地域の調査・研究は共同研究の成功例として、今では自信をもって言うことができる。

さらに共同研究としては、立正大学人文科学研究所の共同研究で、広島県因島市を中心とする芸予諸島の共同研究を史学科の先生方と実施したり、また宮城県塩竈市の都市構造に関する共同研究を社会学科の先生方と実施してきた。これらの共同研究では、小生が専門とする人文地理学では体得しえない部分を、それぞれの専門分野の先生方から教わることができて、楽しい思いをしできた。

た。

共同研究ということでは、西川治先生に誘われて、一九八七〜九三年に全国町村会が組織した町村研究フォーラムの一員に加えていただき、他大学の先生方とともに調査・研究をしてきた。このフォーラムによる調査・研究を振り返ると、まず、町村の高齢化問題の調査・研究では中国・四国の山間地域の町村を訪問し、将来の日本が抱えるであろう高齢化問題を先取りして考察を試みた。同じく地域間交流の調査・研究では山口県東和町や歌山県の山間地域の町村を訪れ、町村間の交流問題や地域振興策を考察した。さらに、町村の人材と育成に関する調査・研究では兵庫県山間部の町村を回り、町村振興に携わる人びとの話しを聞いてまとめた。全国町村会という公的機関の仕事ということもあって、小生の個人的な力では及ばないような調査・研究ができたのは大変に有意義なことであって、今でもありがたく感じている。また、町村研究フォーラムを通じて、少しは立正大学の名を売ることができたと自負している。なお、一九九四年

のことであるが、立正大学地理学科の学生でありながら町村振興のボランティア的仕事に実際に携わり、卒業後もその方面の仕事を希望している学生が、小生のゼミを専攻した。身近にそのような学生が出現したことによりうれしさを感じ、町村研究フォーラムの経験をその学生に伝えることができたのは幸いなことであった。

立正地理学会について

わが国では日本地理学会をはじめ、人文地理学会・経済地理学会・歴史地理学会・日本国際地図学会・日本地理教育学会など多くの地理学関係の学会が組織され、当然のごとく小生も多くの学会に加入している。日本地理学会だけをとってみると、小生が立正大学へ勤務するようになった一九七九年以後の十五年間に、立正大学ですでに二回の春季学術大会が開催されている。

一方、立正大学文学部地理学科の卒業生を中心に、立正地理学会が組織され、機関誌が発行されている。当然のごとく、立正大学に赴任してすぐにこれに加

入することになった。代りにというわけでもないが、香川大学時代に加入していた中国四国都市学会は、小生が関東地方に移ったという理由で、退会を余儀なくされた。

立正地理学会に加入した翌年から、すなわち立正大学に赴任した翌年の一九八〇年から六年間にわたり、年二回発行の機関誌『地域研究』を編集する役目がまわってきた。当時の立正地理学会の年間予算額は非常に少なかった。それで、印刷費を安くおさえるための機関誌の編集および論文などの割付け作業は、編集委員会の重要な仕事であった。編集・割付け作業にはいつも多くの時間をとられたが、われわれ素人の編集・割付けを指導して下さった弘詢社の松島弘社長には大変に感謝している。しかし、この作業以上につらかったのは、地域研究へ掲載すべき広告を各社の方々にお願いすることであった。立正地理学会の機関誌発行などの費用を補填するためには、どうしても必要であったのである。そして、個人的なつながりを頼りに、各社に広告掲載のお願いをしたのであるが、これは、社会人として営業活動を経験したことが

ない小生にとって、はっきり言って辛いことであった。

お世話になった古今書院・大明堂・二宮書店・地人書房・弘詢社などの出版社をはじめとする各社の皆様方には改めて感謝するしだいである。近年には立正地理学会の運営も順調のようで、年間予算を広告に依存しなくすむようになったのはうれしい限りである。

立正大学に赴任して以後、十五年余りをすごしてきた。この間に感じたことのいくつかを述べてきた。まだまだ書き足りないことも多いが、以上で終りとしよう。